

月報

14号

発行所

青丘文庫

発行★韓 哲 曜 編集★金 慶 浩
〒654 神戸市須磨区千歳町4丁目1-3
エバークリナービル5F
TEL (078) 734-5989

ロレンスと朝鮮

水野直樹

最近、同じ大学の英文料の先生と話をしている、驚いたことが一つある。イギリスの小説家D・H・ロレンスの研究者が日本には五百人ほどいるのである。私が「五百人もですか」ときき直すと、「論文を書いているのは二百人くらいかな」という答えだったが、それにしても日本にそれだけの数のロレンス研究者がいるというのは、私には大きな驚きである。

ロレンスは、いうまでもなく『チャタレイ夫人の恋人』で有名な小説家であるが、文明批評家の資質をもあわせ持っていた秀れた文学者であった。歴史書をも含む彼の幅広い文学活動が、今日の英文学研究者にとって大きな研究テーマとなっているのは、当然であろう。ロレンスといえば、鹿刊を命じられた澤田の雑誌『創作』と批評を創刊した白樂精次が、英文学研究者として長年取り組んでいるテーマであることも

思い起こされる。白氏は、ロレンス、ひいては欧米の文学を第三世界論の観点から再検討すべきだと提言している。

そう考えると、ロレンス研究が日本に何百人いたとしても、さほど驚くべきことではないかもしれない。

しかし、ひるがえって私自身が連なっている朝鮮史の研究、あるいは文学や言語など他の分野をも含めての朝鮮研究に関わっている日本人が一体どれだけのいるのか、と考えると、その落差の大きさに愕然とするほかない。朝鮮史研究会の会員は三五〇人くらいだし、朝鮮学会々員は五百人程度であろう。重複している会員、どちらにも加わっていない研究者などの存在を考えると、千人以内（在日朝鮮人も入れて）というところであろう。一民族、しかも日本の隣に住む民族についての様々な分野の研究者を合せても千人、一方、偉大な存在であるとはいっても地球の裏側の国の一文学者を研究する日本人が五百人。ロレンスでさえこうだから、シェイクスピア研究者などになると、想像するに足りない数であろう。

ロレンス研究者と朝鮮研究者の数を比べて日本の文化や学術研究のあり方を映くわけではないが、今さら驚くに当りないことなのかもしれない。しかし、私たちが朝鮮研究者など

ほどの少数派であるかと、改めて思い知らされる数字ではある。

★ 研究報告要旨

◆ 在日朝鮮人運動史研究(第七回)例会(三月九日)

報告者 中島智子氏

テーマ 「アメリカにおけるマイノリティ研究に学ぶ」

昨今在日朝鮮人論が盛んになっているが、十年前の論争卓と比べてみると、是正化を一定前提とした上での在日像の提示をめぐる論争という特徴をもつ、しかし、この論争が必ずしも建設的に展開されていかない理由の一つに、用語や概念の不統一の問題があると思われる。しかも、世界的なエスニシティの活性化の傾向と親と一にする側面がありながら、十分に問題が共有されているとはいえない。以上の反省にたち、今回の報告は、アメリカ社会学の「同化」理論、民族間関係、民族政策の類型論、ニュー・エスニシティ論を紹介し、教育の分野からは多文化、多民族教育と在日朝鮮人教育との接点を探ることを目的とした。

まず「同化」については、ゴードン(一九六四年)以来文

化的同化と構造的同化に分ける考え方が一般的であり、前者はマイノリティによる支配集団による支配集団の文化の受容の問題、後者は全体社会へのマイノリティの参入の問題とおよえることができる。そしてこの二つの変数から民族政策や民族集団間関係の四つの類型が注じる。その例として、シヤーマホーン、ビルト、山中、小野沢による類型論を紹介した。次に在日論にあつては「民族」が古典的概念で語られる弊害を克服する意味でニュー・エスニシティ論が示唆的である。従来のエスニティの定義が「共通の祖先」と「独自の文化の共有」に力点がおかれていたのに対し、これはそれらの裏付けを必ずしも与えなくてもよく、むしろそれらを象徴的にエスニティの中身として利用する特徴をもつ、それゆえエスニティは固定的ではない。エスニック・グループの文化の活性化運動は、象徴的意味合いが濃く、それを必然ならしめる他集団との政治的経済的緊張関係の存在を前提としている。またアメリカの各民族集団のバウンダリーは、通婚の結果重複しており、エスニック・アイデンティティは選択(オプショナル)の性格を強め、エスニシティはますます象徴的な

ものと化している。

最後に、七〇年代半ばより欧米において多文化、多民族教育という用語が多く用いられるようになってきたが、その中からアメリカの教育学者バンクスの多民族教育論を紹介した。単一民族学習から多民族教育段階への展開や、すべての生徒を対象とする実、学校環境全体の変革をめぐる実、周囲のイデオロギー的状况など、在日朝鮮人教育と重なる面もあるものの、最終的にはマジョリティによる統合理論として国民的統合から脱却しようとしている実には批判されるべきであろう。

◆ 朝鮮民族運動史研究会(第五三四)例会(八月三・五、報告者 森川展昭氏)

テーマ 近世朝鮮族の形成について

最近近世で出版された「ヨシイル著 朝鮮族史研究」は、近世朝鮮族形成の始末を李氏朝鮮王朝初期、中国の明・清朝の初期に求め、当時の朝鮮からの移住と自然発生的なものとして把握しつつも、東北地方が朝鮮両国人民の相互移住によって、開墾されたとし一七世紀中葉には、帝制ロシアの極東進出に対し、漢族と朝鮮族が共同防衛に当たった事、

一九世紀の璦琿條約、ネルケンスセ条約、ハルカが湖条約等下口シアの進出が本格化する中で、東北地方の漢・朝鮮族とその他の民族にとって、東北地方を開拓し、ロシアの進出に備える共通の利害が醸成されたことも特記している。

近世を中心とする東北地方への朝鮮族の移住は、一八六〇年代、中国、朝鮮政府の移住取締緩和政策によって本格化し、朝鮮の移住が増大したと強調している。

朝鮮族の東北地方開拓への貢献は、水田耕作に見られ、従来の乾田耕作と対立することなく、進められたとしている。

このような漢・朝鮮両族の経済上の「共同利益」の形成の上に、近代に入って運命共同体的一致を見、反封建、反帝国主義闘争の中でそれを実践してきたという、特に近世を中心とする朝鮮族が多く住む地方での闘争は、朝鮮族によってなめられてきた史事を詳細に述べている。

しかし本書は三・一運動と五・四運動の影響下の朝鮮族の闘争で、一応終了し、社会主義革命へと進む新民主主義時期の闘争にまではふれていない。本書の問題点は朝鮮人の中、国東地方移住には既に土地所有が存在している状況下では当然のことながら、個々別々には利害の対立が存在した

はずであり、その対立や後住定着などのように解決されてい
ったかという点がいまいで分拵乏しいことである。

東北地方南樺における漢・朝鮮族の共同の貢献の成果を強
調するあまり、それにいたる双方の努力の経過記述が不足で
あると思われる。

述並における朝鮮族研究が基本的には、朝鮮史の枠の中で
研究されるのではなく、あくまでも中国の小教民族政策の中
で、中華人民共和国の構成員である朝鮮族としての立場から
迫られていることが本書の行間からもよみとれ、それゆえ
に漢・朝鮮族の「共同性」を強調した文になったのであろう。
我々にとって、述並の朝鮮族の存在をどのように把握する
かが基本的な問題である、ただ単純に、朝鮮の海外国民とし
てのみ把握したり朝鮮史の外述的存在として述並朝鮮族史を
批判する事柄もともなうと思われる。

★新着図書目録内

◆時代日報 一三三巻（一九八四・二）・中外日報 一三八・
8巻（一九八三・三〇）・中央日報 二五一五・15巻（一九八
三） 以上 韓国研究院編集発行 A3

◆韓国近代文学研究 西江大校人文科学研究所編

以上 西江大校出版部 元八二七 AS 三〇五頁

◆月印歌譜 西江大校人文科学研究所編 以上

西江大校出版部 81・3 AS 三八九頁

◆「魏志」東夷伝への構造 孫崇輝著 東京大

和書房 86・2 AS 二〇六頁

★次回案内

(一) 在日朝鮮人運動史研究関西部会（第七回）例会

日時 一九八六年三月九日（日）午後二時

場所 青丘文庫

テーマ 神美（兵庫県豊岡）鉱山について

報告者 洪 禪進氏

(二) 朝鮮民族運動史（第五回）例会

日時 一九八六年三月二十五日（土）午後三時

場所 青丘文庫

テーマ 東洋とめぐる人脈について

報告者 梁 永厚氏